

---

# **異世界でした！**

ぽち子。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界でした！

### 【ΖΖΠード】

Ζ4454Ρ

### 【作者名】

ぱち子。

### 【あらすじ】

失恋からの翌朝、いつもの煎餅布団とは違う、スポンジケーキのようにふわふわした感触で目が覚めたら……そこは異世界でした！？

なんて非現実的なことあるはずがないのに。

私一体どうしちゃったの！？ここはどこ！？とパニックになつていると、隣で寝ていた美形男さんは不可解なものを見る目。

……どうやら私、異世界トリップしてから8年は経っているそう。異世界トリップなのか記憶喪失メインなのかいまいち解らないけ

ゞ、 とりあえず夢ではないみたいですね。

短編の「異世界の朝でした」の連載です。（1は短編と回じもので  
す。）

今のところ恋愛の要素は薄いですが、今後は恋愛？も絡む可能性あり  
ます。

不定期連載ですが、よかつたらお付き合ってください。

ああ、憂鬱な朝だ。瞼が重いのはきっと昨日泣いてしまったせい。私は昨日失恋した。よりによつて私の親友とくつつかなくともいいのに、と何度も恨んだ事か。

好きな人だった彼と、親友だった彼女の痛々しいぐらうに悲しそうな表情は脳裏にくつきり焼きついてしまった。

一度に恋も友情もなくしたようなもの。いくらポジティブが取り得のタフな私でも、そりやきついって。

うだうだ言つても仕方がない、と潔く目を覚まさうとしてようやく違和感に気付いた。

……私の布団、こんなに柔らかくないんですけど。

年代物のマイ煎餅布団ではなく、まるでケーキのスポンジの上のようふかふか、いやもうふわふわだ。

ホテルだつてこんなふわふわは一流ホテルの主にセレブが泊まる部屋ぐらいしかないんじやないだろか、つてそうじやなくて！

ぱっちり目を開けると、まず高い天井が見えた。勿論家の天井はこんなに高くないし、白くない。

がばつと起き上がり、辺りを見回すと高そうな調度品の数々……まるでテレビの特番で見た最高級スワイートルームのようだ。

私の部屋の何倍だろ？……軽く、5倍？10倍？もつとか？

平凡な築18年の一階建て一軒家の我が家全体の敷地にしても足りないんじゃないですかつてぐらいに広い。無駄に広すぎる。

てええつ？——じるじよつ！？

驚きすざかしく叫ぶのも忘れて、しばし茫然。一応心中では叫んだけど。

ちよつと待つて、落ち着いて考えてみても昨日は落ち込んで早々

に布団をひいてもぐり込んだはずだ。それは間違いないはず。

だとしたら誘拐？まさか、こんな平平凡凡の一般人を誘拐して何の利益があるというのだろうか。

ちなみに私が絶世の美女なんてことも、大変虚しく悲しいけどない。どうみても純日本顔でどこにでもあるような顔立ちだし。

かといって先程紹介したように家はお金持ちというわけでもない。親父のビール代が一本カットされちゃうぐらいだしね。

だとしたら何だ、私ってば見知らぬお家に気が付かないうちに潜り込んだ！？

「……随分と、今日は早起きだな」

茫然とする私の耳に氣だるげな、それでも充分な低い美声が届く。はつと隣をみると、今起きたのか男が起き上がって大きく腕を伸ばしていた。

こんなふかふかで広いベットなのに身体が凝つたのだろうか……つてそうじやなくて。

誰だ、この美形は。正直あまり見たことのない美形男だ。目鼻のはつきりした俳優のようにカツコイイ外国人みたい。

こいつが私を手籠めにしたとは考えにくい。正直ここまで美形なのに私みたいな姿の女に手を出すなんて考えにくい。

まさか私なのかな？私が恥女なのかな！？

頭を文字通り抱えた私を、美形男さんは整った眉を寄せ訝しげに「チラを見ている。

「寝ぼけているのか？」

ああ、夢であるならどんなにいいか。夢であつて欲しい！

そう願つて自分の頬を抓る。残念ながらこの痛みは夢でない。

目の前の私の行動に、美形男さんは奇妙なものを見てる目つきだ。

「おい、サシヤ？」

「え？」

……サシヤって言つた？ちなみに自己紹介が遅くなつたけど、私の名前は今野たや。

外国人が『さや』の発音がしにくくて『サシヤ』つていう風に聞こえなくもない。

といひことは知り合い、なのだろうか。考えないようにしていたけれど、今まで……一緒に寝ていたよね？

「……まだ、怒つているのか」

「ええつと……」

どうこの意味だ。私の珍しい記憶ではこの美形男さんにたいして怒つたことはないはずだけど。

返す言葉がなく沈黙したのを肯定と誤解したのか、ますます機嫌が急降下するかのように眉間の皺が深くなる。

美形がそういう顔をすると、かなりの迫力で怖つて！後ろに黒いの見えてますよーーー！

「あのーむしろ何が何だかわからないんですけど！」

「……は？」

「だから、どうして自分がここにいるかも、貴方が誰かも全くわからんんだつて！」

思い切つてありのまま言つた、ついに言つたぞ！！

美形男さんは私の言葉に、固まつた。やはり訳がわからないといった様子だ。

「お前は何を……昨日のあてつけか？」

えええっ！？なんでそんなに怒るんですか！？

最早迫力だけではない。怒りのオーラが見える。さすが美形はオーラさえも手足の「」とく操るのか。

オーラに怯えつつ、負けじと私は叫ぶ。

「あてつけじゃなにってー本当に訳がわからないんだってばー！」

痛い沈黙だ。そりゃそうだ、いきなり隣で訳のわからない話をしだすんだから。

ていうか、本当にこの人とはどういう関係な訳？

観念したかのように、美形男さんは私の前に手をやつて制止した。

「ちょっと待て……一応聞くが、自分の名は分かるのか？」

「今野さや……」

ぱつりといった私の言葉に美形男さんは一瞬いぶかしんだけど、はっと何かが思い立ったようだ。

……まあ読み取れるほど表情が大きく変わっていないから、おそらくだけど。

眺めていると美形男さんは私の肩を掴んで身を乗り出しつきた。ち、近いってー！

「今、自分の歳はいくつだ？」

「え、16、だけど……」

「16……」

誕生日はこの前の春に迎えた。高校入学して直ぐの頃……今は夏

よね？

首周りが暑苦しく感じて気付いたけど、髪の毛長くない？高校入学のときにぱぱっさり肩に付かないぐらいまで切つたはずなのに、今は腰の辺り。

こんなに長く伸ばした事ないんだけど、髪の先まで手入れがされているのかツルツルのサララサ髪だ。

まるで自分の髪でないみたいと毛先をこじつていると、美形男さんは突然腕を掴んで引っ張る。

「ちょっと…」

「いいか、良くな聞け。お前は今、24歳だ」

……はい？

腕を掴まれ引っ張られたまま、何畳もありそうな無駄に広いベッドを降りる。

そのまま、化粧台の田の前までいって、鏡にかぶせてある布をとった。

田の前には、もちろん美形男さんと私。私なんだけど、毎日見知つていてる私じゃなかつた。

腰までの長い黒髪にやや大人っぽくなつた顔立ち、背は伸びたみたいだし……うつむ、ペッタンからちよつと手に余るぐらには胸が育つたようだ。

少なくとも16歳には見えない。むしろ16歳なんて、何歳サバよんではいるんだつて話だ。

かなり認めたくないが、紛れもなく『24歳の私』がそこにいた。

「……いやいやいや、ないから！」

朝起きたら、8年後でした！？そんな莫迦な、じゃあ私の高校生生活は？キヤハハウフフな青春はどこへいったしまつたの！？

正しくは憶えていないだけになるのかな？それでも身体は24歳でも、頭の中は16歳だってば！

それに……自分で言うのもあれだけど勘の良い私は非常に嫌な……もといありえない予感がして頭の中で警報機がなりっぱなしだ。そしてそれこそが最も重要で、私自身を揺るがすものではないだろうか。聞きたいけど、聞きたくない！

「お前は私の妃だ」

「き、妃？」

何の冗談だ、それは。いくら成長をしていたとしても平平凡な顔立ちはそう変わらないというのに。

ま、まさか、これが噂の綺麗な人が駄目つていう特殊タイプ？むしろ自分の顔でおなか一杯？

それに妃つて……何、その言い方。妃つてつまりー……偉い人で、王様みたいじやない？

目の前の美形男さんが王様であるのは異論がないけど、私がお妃様？

あはははは、まさかそんなこと。乾いた笑みを浮かべるしかない私に美形男さんはさらに言い募る。

「お前は8年前にこの国、ひちうの世界に渡ってきた……つまりお前のいた世界とは異なる」

異なる世界、異世界。次元が違う。

そりやさ、私もそういうた類の話読むよ。

異世界にトリップして運良く王子様に出会って保護されて、都合の良いことに恋をして糺余曲折の末ハッピーエンド。

二人は末永く仲良く暮らしましたとさ。

……つてもう終わつてんじゃん！私、もう話終わつているところ

じゃないか！？

まったく、そういう定番のことを憶えていないんですけどー！

「う、うれでしょ……」「

「嘘は言わざ。」ひびひ渡つてから2年後にお前は俺の妃となつた

つまり6年前、よね。18歳……どうしてそんな若くして結婚と  
いう大切なことを決めてしまったんだ、私！

まだ心は若いからといって結婚に夢があるわけではないけど、こ  
れはあんまりだ。気が付いたら人妻ですか。

いよいよ頭を抱えて悶えたい。むしろ意識を手放して夢とこつこ  
とにしたい。

「それでお前はどじまで覚えている？この世界のことば？……俺の  
ことば？」

じいっと、紫の瞳が覗き込む。

……そういえば見たこともない色。綺麗だなっと思つたけど、瞳の  
奥に焦燥が見えてドキッとした。

うん、でも覚えがない。こんな綺麗な瞳をみたら中々忘れられな  
いと思うんだけどな。

無言で首を横に振つた私に、美形男さんは落胆したように見えた。  
まあ、さつきから言つて居る通りあまり変化がないんだよね、こ  
の人。

とりあえず、恐る恐る手を伸ばしてその薔薇色の頭を撫でといた。  
うわ、髪の毛が嫌味なぐらいでさらさらだし。  
撫でられて少し吃驚しているみたいだけど、振り払う様子もない  
し大人しい。

「……まあ良い」

なんか吹っ切れたのか、疲れたように深くため息をついた。  
私のせいじゃないってば。憶えていないんだから。

「俺は執務があるから行くが、お前は暫くじつとしている」

「執務？ そういえば……あなたの名前は」

「ライヒアルト・ヴァン・ウェート。この国の王だ」

疲れたように美形男さん……ライヒアルトさんは言つ。

ああ、やっぱり王様なんだ。てことは何て呼べばいいんだろう？  
そんな表情を読んだのか、「ライと呼べ」と素つ氣無く言つた。

「あのライ……様？」

「ライ、で良いと言つているだろう。直ぐに人をよこすから待つて  
いろ」

くしゃりと一撫で、私の頭を撫でてから部屋を出て行く。  
うー、撫でたときに微かに笑っていたのにちょっとどきつとして  
しまった。

本当にここは異世界なのだろうか。確かに部屋の雰囲気は中世的  
だけど見たことがないものもある。

何より、鏡に映つた自分はも16歳ではない。受け入れがたいが、  
現実みたい……。

それと本当に私はあの人、ライの妃なのだろうか。……まあ、隣  
に寝ていたみたいだし。

妃かーでも大国なら他にもお妃様、大勢居るよね。権力者のあり  
がちパターンというか。

つて、大切なことを聞くのを忘れていた！

「私つて……王妃、じゃないよね？」

まさか自惚れすぎだ、と叱ってくれる人は勿論居ないのである。  
いつして私の『8年経つた異世界生活』は始まった。  
……記憶喪失メインなのか異世界を楽しむのがメインなのか解ら  
ないけど、とりあえず私は元気みたいですね。

## 1・(後書き)

今野さや

16歳のときに異世界トリップして絶余曲折あって、ライのお妃様に。

さやが詭つてサシヤと呼ばれている。

ポジティブでタフな女子高生だった現24歳。

ライヒアルト・ヴァン・ウェーネ

ウェーネ國の王様。さやのだんな様。

超美形の26歳。

お読みいただきましてありがとうございます。

不定期連載になりますが、どうかお付き合いください。

良かつたら、感想よろしくお願ひいたします。

誰だって一度は夢を見るはずだ。

現実世界に『何か』が起きて次に目が覚めたら、そこには見知らぬ異世界。

ここにちは、美形の王子様と巡る陰謀と甘いロマンス。  
素性を疑われたり命を狙われたり王子様の従者とひと悶着おきた  
りすれ違いながら愛が育まれて、そして二人は結ばれてハッピーエ  
ンド。

これは小説単行本一冊どころかシリーズ化されるんじゃないのつ  
ていう物語を、あらうじとかすつ飛ばしてハッピーエンド後の奮闘  
を描く物語である！

……なんちゃって。

いや一部はなんちゃってじゃないんだけどね！

所謂異世界トリップ初日の朝。正しくは初日ではないらしいけど  
記憶がないから仕方がない。

どうやらどの世界でも朝というのは変わらないみたいだ。

カーテンからは日が燐々とさしてゐる。ああ、朝日が眩しい。今日  
は良い天気みたい。

しかし……気が付いたら24歳になつていて、いつの間にか異世  
界でしたって……。

いや逆か？気が付いていたら異世界でいつの間にか24歳でした？  
ようするに16歳のはずだったのに8年後で24歳になつてしま  
した。記憶喪失なのか、よくある憑依系なのか解りませんが全く以  
つてこの状況は笑えない。

どの道確かなのは今までの日常は違うことと、恐らく青春を謳歌するはずであつたスクールライフは戻つてこないこと……。  
そういうえば私の記憶中では昨日失恋したんだっけ。

一生の恋と信じていたものと同じぐらい大切な親友をなくして乙女チックモードだったはずなのに、失恋の傷なんてどこかに行つてしまつたよ、くそ。

詳しい話は前回の話を見てね！と誰かに言つてみたりでそういう訳で、現実逃避はこのあたりにして。

さて美形男さん、もしくは24歳の私の旦那様らしき人で、そもそも一国の主であるライヒアルトさん……ライは仕事があるといって出て行つてしまつた。

このだだつ広い豪華な寝室にいるのは事情がまだ飲み込めていい私と目の前のメイド服を着た美人の女人。どうやらこの人、専任のメイドらしい。

ライと入れ替わりに入つてきたかと思うとテキパキと私の髪の毛を整えた。

気が付いたら、ちょっとボサボサ気味だったのに艶やかになつている不思議。

……それでもこの世界の顔面偏差値は総じて高いのかつてぐらいにお目にかかるのが少ない美人。まだ会つたのは一人目だからかな。

むしろこの人があの美形男さ……ライ、の隣にたつ奥様でも違和感はない。何でメイドなんてしているんだろう？

「サシヤ様」

まじまじと遠慮なく見ていたら、にっこりと笑つて私に向き合つ

た。

うーん、やっぱり美人。清楚な感じに美人のお姉さんで、新入生代表で挨拶していた校内三大美女の倉木さんと並べると姉妹みたいに見える！ってそうじゃなくて。

あ、そういうえば私の名前は「サシヤ」じゃなくて、「今野さや」という純日本人の名前だ。

だけどコチラの世界の人の見た目外国人に似ていることから、おそらく言い難いから「サシヤ」なんだろうと思つたのでも言わないけど。

田の前のメイドさんは綺麗な姿勢でお辞儀をする。まるでお手本そのものだ。

「私は王妃付き筆頭侍女のアーネルと申します」「はあ……」

てつきつ王様専用かと思つたけど違つたね。

王妃付き筆頭侍女つてことは、つまり王妃様の一一番の側近だつてことだよね。

王様はあのライで、王妃様はその妻だから……容姿的にも身分的にもどうみても側室であるはずの私つて、もしかして嫌な女じやない！？

アーネルさんからしたら主である王妃様の憎き相手つてやつじゃ。

それなのにアーネルさんは二口二口笑顔で少なくとも悪意はなさそうに見えるけど心の中までは解らない。

これは……なんでもないことと弁明したほうがいいのか…いや何にもないこともないのか！？

「本当に、記憶がないのですね……」

起きてもいられない修羅場の予感に焦つていると、はあつと困つたよ  
うにアニエルさんは溜め息をついた。

その様子にライから聞いていたみたいだけど、どうやら半信半疑  
だつたのかな。

ていうか普通に自己紹介していたけどアニエルさんは私と顔見知  
り？

「あの、アニエルさん？」

「アニーとお呼びください。サシャ様はいつもそう呼んでましたか  
ら」

フレンドリーな雰囲気についつい私も笑みを返す。  
こんな美人さんと仲がよかつたのか、私！

美人と知り合えるなんてすごいな……つてあれ、何か大切なこ  
とを見逃しているような……そんな違和感が。  
ちょっと待てよ。落ち着いて考え方直して、アニーの言葉を頭の中  
で繰り返す。

……アニーは「王妃付き筆頭侍女」なのに私と仲が良いんだ？あ  
れ、私って側室だよね？ねえ！？

「あの……」

「はい」

「王妃つて……一体どなたのことなんですか？」

まさか、まさかそんなことはあるはずがない。  
何度もしつこじょうだけ私は平々凡々のビリービリでもいるような

女だ。

異世界トリップにありがちな特別な力とやらも今のところないみ  
たいだし、自分でもあるようには思えない。

精神的には16歳だからといって夢を見るような性格でもないし。気付いたら24歳になっていたとしてもだ。

あの美形男、……ライだってそこまで酔狂なことをするとは……思いたくない。思いたくないけど！

まるで神様仏様に祈るような気持ちでアニーの言葉を待つた。待つたのに予想通りというべきか、アニーは輝かしい笑顔で答えてくれる。

「勿論、サシヤ様以外にはいらっしゃいません」

……ですよねー！

ついうなだれたくなってしまい、がくくりと手と膝が床につく。所謂绝望ポーズ。アルファベットの『○□』みたいなイメージ

で、私は力尽きた。

一体何の罠だ、これは……やはりあの美形男ライは自分が美人すぎる故にどちらかというと美人じゃない方が好きなんだ。

これは確定だ。あいつは、自分大好きナルシストが高じて妻は私みたいな平凡な女しか受け付けなかつたんだ！

「ちなみに側室もいらっしゃらず、ずっとサシヤ様一筋ですわ！」「……わざわざありがとうございました」

私の中で、ライのイメージがどんどん悪くなる。美しさ故の過ちなのか分からぬけどそれでいいのだろうか。

普通は格好良い王様には美しい王妃様が並んで和やかに微笑みながら手を振ってくれる、国民の日の保養みたいなものであるはずなのに。

そもそもどうして異世界人であるはずの私と、国のトップである王様が結婚することになったのだろう？

そりゃ異世界トリップはありがちだけど、現実的に見れば有り得

ないよね。

「ぶつちやけて素性のしれない女を王家に入れていいの？  
馴れ初めを聞いてみたいけど、とんでもない真実が出てきたりで  
聞きたくもないようなもどかしい葛藤。

いやでもここは聞いてみないと何もかもが始まらない！

「ねえ、アニー？」

「はい」

「私がこちらの世界に来たときって知ってる？」

「ええ、知っていますが……お答えできません」

「うん？ 知ってるのに教えてくれないの？」

お答えできませんってことは言いたくない、もしくは口止めされ  
ているということか。

「一体どんなことをしたんだ、私！？」

16歳の私を信じたい……ぐどいようだけど気分的には今も16  
歳だけ。

「えーと、じゃあ王様……ライと結婚に至った経緯とかは？」

「それもお答えできません。陛下にお聞きくださいませ」

につこつと有無を言わせない笑顔。

な、なかなかにこの人は強者だ！

さすがは王妃付き筆頭侍女のことはあるなーていうか私専用のメ  
イドさんははずなのに！？

私の言つことは聞けんのかーいーっとこうシッコ!!は、ええ、勿  
論出来なかつたです……。

「ですがサシャ様が、我がウィートラングの王妃でいらっしゃる事  
実は紛れもない眞実でござります」

「……アニー？」

アニーの表情は微笑んでいるけど、どこか不安げに揺れている。誰かと一緒に表情だと思つて……出かける前のライと同じ表情だと気付く。

どうしてそんな顔をするの？もしかして思つたより、これは深刻なことなのだろうか。

そもそも、私はどうして記憶を失つてしまつたんだ？

あと、もう一つ。なによりも大切なこと……どうして私は結婚したのだろうか。

だって結婚つて事は私はいつも側で生きていくことを決めたって事だよね？

正直今は16歳の感覚しかないから、不思議にしか思えない。けど。

「……ちよつと色々忘れちゃつたから正直嘘みたい」

「サシヤ様……」

「だからいろいろ迷惑かけるけど、よろしくね」

「……はい！」

ちよつとビックリか、最初に戻つちゃつたんだけどね。でも24歳である事実は覆らないし何事も楽しまなくては。ようするになるようになれだ！

それに平凡な一般家庭の私には滅多に体験できない生活が味わえるかも。ちよつと期待。

「ごめんね、質素儉約家の我が家たちよ……と、邪なことをちよつと考えていたらアニーが輝かしいばかりの笑みを浮かべていた。

「さあさあ、サシヤ様！ そつとなれば、美しく着飾りましょうね？」

今までのシリアルス顔を吹き飛ばすような、高揚したアニーの表情に思わず引き下がる。

田の前には、何やら『ふりふりなピンクドレス』らしきものを持つているアニー。

え、それ着るの？どうみても可愛い系しか似合わないのに、こんな凹凸のない平凡な顔の女に着せると言うの？

それに私つて……一応、24歳だよね！？

本能的な何かが逃げろ！と言っているが、私に勿論逃げ場はなかった……。

まさか普段から逃げ回っていて、記憶がないことをいいことにあれこれと遊ばれていることなんて。

今の中には知る由もなかつたのである……。

私の異世界生活は楽しいばかりではないことに気付き、以前の私に少しだけ同情した。

## 2・(後書き)

サシヤ（今野さや）

16歳の女子高生のはずだった、現24歳。  
気付いたら王妃様にランクアップ。

アニエル

サシヤ王妃付き侍女。

清楚系美人の見た目に反して、色々勢いのある人。  
ちなみに22歳。

お読みいただきましてありがとうございます。  
良かつたら感想をよろしくお願ひ致します。

ふりふりのビビンク可愛い系を着るか、フリルあるけどだけちよつと上品ドレス風を着るかの選択で、勿論選択の余地はありませんでした。

……鏡に写った自分を改めてみると、これって痛い人じやない？確かに十代であれば多少なりとも似合っていたかもしねないけど、どう見ても二十歳を超えている私にはきついものがある……。

アニーは物凄い笑顔なんだけどね。正直アニーのほうが似合つと思うんだ。

それが開き直るしかない。だって信じられないけど、私にとつたら『16歳』の朝でしかないしね！

「サシヤ様、それでは遅くなりましたが朝餉の支度が整いましたのでこひらに」

アニーが隣の部屋へと誘導する。

やはり豪華な寝室の先は、豪華な部屋が待っていた。

ここはリビングみたいなところ？4～5人は余裕で座れそうなソファーが置いてあって、複雑な織物のような絨毯がひかれている。壁側には絵画が飾つてあって、本棚も。おお、使っていないけど暖炉らしきものもあるよ……

まさにお城の中のような……つてお城なんだよね、ここって。

しかもドッキリでない限り、城は城でも王城である。さらにその主人の妻、なんだよねえ。

そう思つと何だが胃の辺りがキリキリと……と、思つたら「ぐー」と空氣を読まざになつた。

……はい、おなかがとつても減りました。

「どうぞ、お召し上がりください」

「ありがとうございます……」

「うへ、恥ずかしいつーアニーは暖かく微笑んでいるのが更に居心地悪いの何の！」

仕方がないじゃん！昨日は失恋したから、殊勝にも夕飯をぬいちやつたのが悪かったんだな。

つて本当の『昨日』は知らないけど。

目の前にあるのは極々、いやとても美味しい洋食らしきもの。見た目はそう変わらない。白いパンにサラダに、暖かいスープ。サラダの葉っぱは見たことないのがあるし、スープの色は赤いけど……こんな美味しいそうな香りがするから大丈夫だよね？

「い、いただきます」

マナーを知らないけど、とりあえず白いパンをちぎって口に入れると。

……うん、期待を裏切ることなくパンですよね。

でももっちりしていて焼き立てみたいに美味しい！

スープもサラダも、知っている味とはちょっと違つけど、一応『文化が違う』から味付けも違うよね。

それに許容範囲どころか、とても美味しい！

朝からがつつく私を、アニーはにこにこと笑顔のまま見守つていた。

ちょっと見られて食べにくかったけど、完食してお腹も一杯で満足。

「「」おやつをまでした！」

「お口には呑いましたか？お茶をどうぞ」

「美味しかったよ！ありがとう」

お茶も紅茶みたいなもので、とっても香りがよくって美味しい。さすがに異世界とはいえ、これが最高級のものだと気付く。なんというVIP待遇。本当にいいのかな。美味しいお茶を一服したところで、これからどうすればいいんだろ？。

アニーは急かす様子もなく相変わらずにこにこ笑顔のままだし。まさしくメイドの鏡……と感心ではなくて、なーんか妙な気分だ。例えるならば、都会に出た息子が故郷に帰ってきた時に手厚く迎えるときのような……。

ちなみにこれは我が家の親父殿の実体験らしい……だから毎年帰省していたのか。

「サシヤ様」

「は、はい！」

突然話しかけられて、明後日の方に行きがちだった思考を戻す。不思議そうなアニーに何とか笑顔を取り繕つたら、追求はやめてくれた。

うん、やっぱりメイドの鏡だ！

「陛下より公務の取りやめについての指示は受けております」

そりゃそうだよね、記憶喪失みたいなもんだもん。

極々一般人で100%純粋の庶民である私にそんな高度なことなどできるわけがない。

貧相な頭では、精々民衆を前にして微笑みながら手を降っている

イメージだけども！

「それともうおーつ……」

と、途端にアニーは晴れやかな笑顔を消し、暗雲立ち込めるかのように物憂げな顔をした。

清楚で明るいイメージしかなかつたアニーにしては珍しい表情。な、なんがあるの！？と私は内心焦る。

「サシヤ様には王妃の再教育として、後見人でいらっしゃるクレイ様に会つていただきます」

「後見人？」

「はい、クレイ様はヴィートランドの古くからの諸侯のお一人であります王家にも深くかかわりのあるお方です」

へえ、じゃあ偉い人だ。そんな人から王妃教育受けていたのか。何となくイメージでは、莊厳な白髭を蓄え厳しい眼差しのジェントルマン。

先が思いやられるな……テーブルマナーなんて勿論知りませんとも。

「サシヤ様、何があつても気を遠くなさらないでくださいね……」

「……はあ？」

苦渋の決断をするかのようにアニーは大げさに顔を顰めた。

一体に何を、と問う前に閉じられていた扉が突然開かれた！

「おそーいーー！」

開いたと同時に、開いた本人と思われる人物が怒りを顕に叫ぶ。

あまりのことに驚いたのと同時に、その人物の服装に唖然……。

何だこの、目の痛い色は！真っ赤で更にど真っ赤なドレスに頭が傾きそうになるぐらいい重そうで派手な真っ白い帽子という奇抜な格好。

ちなみに帽子は羽アレンジされていて、一瞬鳥の巣をつけているかと思った……。

エメラルドグリーンのハイヒールをこつこつと響かせながら近付いてくるものだから、逃げたくてたまらない！

それに、それにだ。ドレスはどう見ても女性ものだけど、よく見たら女性にしては身長も肩幅があつて……。

先程の扉を開けたときの叫び声は女性の声ではなくて、随分低い男の声だったような……。

「ちよっとお！聞いてるの！？」

「……す、すみません」

顔を近くで見るとこれまた美形！私、美形に弱いはずなのに全然嬉しくないよ！

美形なのに、どう見てもカッコイイのにどうしてバツチシ化粧してあるんですか！？

パープルのアイシャドウに赤のルージュ、金色に近い髪の毛は綺麗な縦ロール……違和感あるけど、美形だから似合つていかないわけではない不思議……。

くそ、どんな格好をしていても似合つなんて美形ってやつぱり得だ。

「……………ひつしたの、ム。本当サシャなの？」

「クレイ様、先程申し上げたとおりサシャ様の記憶は今16歳です」「ほんとに記憶ないのねえ」

はあ、とため息交じりに物凄く呆れたご様子。

ん？ちょっと待つて。アニーってば今なんて、誰様つて言つた？

聞き間違いでなければ、これがあのクレイ様？

私のなかの厳しそうな紳士のイメージがガラガラと崩壊する音が聞こえた。

「うそだ。こんな奇抜な格好が許されるなんて……。

「まあ、いいわ。記憶がないならぬで、この方が返つて調教のしがいがあるじゃない？」

「クレイ様、あまりサシヤ様を虐めないでくださいよ！？」

「安心なさい、あたくしが立派な王妃に再教育してあげる」

……間違いない。

この人の性格はSだ！生糞のどSだ！！

扇（これまた原色ピンク）を翻しながら妖艶と微笑む姿がハマリ過ぎです。

ハマリすぎだけど、常識的に考えてどうみても女装の変態さんにてっきりです。

私は気が遠のくなりそうになつたのは言つまでもない……。

前途多難な様子にセレブ生活とつ夢めどりやう早くも崩れてい  
るみたいです。

王妃いらないので、帰つて欲しいとはさすがにまだ言えませんで  
したとも……。

### 3・(後書き)

遅くなつてしまい大変申し訳ございません！  
人物紹介はまた次回にて。

「ちょっと、何コレまずいお茶ねえ」

「そうでしたら召し上がっていただかなくともよろしいのですよ」

「あら、あんたもメイドならもてなす義務があるでしょ？」

「私がお仕えするのはサシヤ様ただお一人ですので」

何故かくつろぐクレイ様と給仕するアニーは顔を仰わせて微笑みあう。

表面は美形同士の微笑みあいなのに……ひ、後ろに蛇とマングースが見える。

窓の外は晴れやかのはずなのに、どうしてかこの部屋吹雪いている様にサムイよ！

所詮凡人の私は、その矛先がコチラに向かないようにじっと黙つた。

しかし黙つたのにそつぱいかないようだ。

「とりあえずサシャ、あんたどこまで憶えているの？」

「どこまでつて……まったく憶えていません」

憶えている中で、私の『昨日』はあの失恋した日。正直そのことを考えるとまだ胸の辺りが痛いけど、それどこのじやないから大してどうつてことないかな。

それよりも驚きの連続と、ありえない光景続きでそつちのほうがどうにかなつてしまいそうだ。

そして最たるもののがこの田の前にいる……女装変態貴族。いやほんとに、女装だ。

「そう。前から面白いとは思っていたけどここまでとは思わなかつたわ」

はあ、とため息をつくけど呆れているようではないみたい。  
ていうか貴方に一番言われたくないんですけど!と言い返したい  
が後が怖いから言わないでおこう。

それより、前からつてことは『以前の私』を知っているのだろう  
か。

「えーと、クレイ様は私のことを知っているんですか?」

「知っているも何も、あなたの後見人はこのあたくし。それと気持ち悪いから様付けはしなくていいわ」

そういうとわざとらしく寒気がしたように身を震わした。  
でも、にやにやしたその表情から面白がっているクセに、と思う。  
うーん、何となく以前の関係が予想できるな。後見人って言つた  
し。

以前から意外にもクレイとは遠慮がいらないほど仲が良かつたみ  
たいだ。

「じゃあクレイ。どうして私がこっちの世界に」  
「あなたの過去の話はしないわよ」

「言つ前に、先に断られたよ!」

またなんで揃いも揃つて過去を言いたがらないんだろう。

本当にににかあつたのか?若干知るのが不安になつてきましたよ。

一体私はどういった人だつたんだろう……今の『私』はどう振舞  
つたらいいんだろう。

「とりあえず、あなたが今記憶喪失なのは一部の人以外秘密だから

「氣をつけなさい」

「はーい……」

「返事はのばさない！本当に解つてゐるの？」

ドビングの扇をぴしりと鼻先に突きつける。

いちいちその仕草が似合つてゐるけど、どうみても男……。  
いやでも、もしかしたら男とは限らないんじゃ……！？

「あの、クレイは男なんですか？」

「あんたその質問をす・る・な！と何度も言つたら覚えるの、この鳥  
頭！！」

ひ、ひどい言われようだ！

しかも今の記憶の中では初めて聞いたのに！初めてなのにそんな  
にも目を吊り上げて鬼のように怒ることないのに！  
以前からこのやつて怒らせていたんだろうな、私。今後、この話  
題は避けよ！……。

「とにかく！なにか他に質問ないの！？」

「え、えーと……そうだ！魔法とかつてあるんですか！？」

そうやつ、異世界といったらこれでしょ！

いつも見ても読書家の私はイギリス発祥の魔法学園物も読破した！  
定番中の定番の魔法要素はあつて当たり前だと思うけど、トリック  
物によつてはなかつたりするから要注意だ。

さあ、この世界に魔法はあるかな？若干ワクワク氣味の私をクレ  
イは変なものの見る目つきをした。

ていうか、さつきからその目しかしてないね。女装しているよ  
な人にそんな目をされると傷つくな。

「……あんたって本当に記憶ないの？それなのに同じ質問、2度目

ね

「へ？」

「期待したところで、あんたが思い浮かべているような魔法はないわよ」

そっか、やっぱりないのか。そんな雰囲気はしたけどね。うーん、残念。折角現実世界じゃありえないことがあるかと思つたのに。

今までの感じから似てるのは中正ヨーロッパ風。でもそれにしてはなんだか文明が発展している感じ。

だつて部屋の明かりは蠅燭とか火とか使つんじゃなくて、どうみても電化製品みたいだもん。

一体どうなつているんだね？　置いてこるスタンダードの照明には「一灯はないし……。

「魔法はそりゃ遠い昔にはあったかもしないとは言われてゐるわ。

でも今はそんなものは聞いたこともないし見たこともない……ただね

「ただ？」

「ウイートランドの王族には呪いが使えたりは伝承は残つてゐるから、陛下にでももう一回聞きなさい」

ま、まじない？呪いとかそういうのってこいつが陛下つて……ライのことか。

確かに見た目だけならライって魔法とか使えそうだけど。でも伝承つて事は昔の話だよね。

クレイの口振りからすると、今はそりでもないみたいだし。

さつきから疑問は全部ライに投げられているのが正直納得いかないけど。

とりあえず、すつきりしないまま頷いておいた。

「さて、そろそろ本題に入るわよ」

「本題?」

「だから、あんたを再教育するため来たつていつてるでしょ」

そうつて指をパチンと鳴らすと、アニーとのほか2名のメイドさんが現れた！

初めて見る顔のメイドさん2名も美人つていうか、ビキニとかという可愛らしい感じの子だ。

顔立ちに幼さがあるから、きっと未成年だろうな。

私と同じぐらいの16歳かな？同級生にもこんな可愛らしい子つていなかつたような。まあ今は私は成人しているけどね。

こここの制服なのか、フリルのあるメイド服がヘンに似合つていてコレが『萌え』というものか！

「サシヤをドレスに着替えさせて頂戴。立ち振る舞いの特訓をするわ」

「はい、かしこまりました」

「では早速失礼致します」

新たなる世界を垣間見て目眩保養にしていたら、突然可愛いメイドさん一人に腕をつかまれた！

両腕にくつつかれて、まるで拘束されているみたい。いや、もしかして本当にそうだつたりして……？嫌な予感がして冷や汗がつたる。

すると田の前に立つたアニーがものすごい笑顔だ。

「サシヤ様、お着替えしましょうね」

……悪夢、再び。

顔の引きつる私に、両腕のメイドさん一人も物凄く興奮した笑顔。私に対して好意的なのは解ったけど、私には味方が居ないと悟った瞬間だった……。

これから自分の運命に顔を青ざめっこると、さうに地獄のような一言。

「あとコルセットもきつて締めておこへ」

アニーの後ろではクレイが妖しく笑う。  
ていうかこのドリ！絶対に楽しんでいるよ、この変態女装貴族！  
睨みつけるけれど、どこ吹く風か。まったく怯んだ様子もなく。  
声にならない悲鳴とともに、私はいよいよ弄ばれましたと…  
…。

きつく締め付けられたコルセットは凶器であり、やつぱりの田の前の女装貴族はスバルタのドリだ。

美味しそうな食事も、豪華な部屋も今は地獄そのもの。

私はここについたことが全く向いていないことを知りました。

淑女の道は遠いようです。

ていうか本当に王妃だったのだろうかといつぱり、道は遠いのであつた……。



#### 4・(後書き)

サシヤ

異世界トリップした一応王妃様。

適応能力は作中一番かもしれないほど、ポジティブ。

クレイ

ウイート国の中古からの諸侯であり、サシヤ王妃の後見人。  
しかしその正体は、D.Sの女装変態貴族。

どうみても男だが、美形補正で女装が似合っている。

アニー

王妃様命の侍女の鏡。

王妃が着飾るとキャラが少し変わる。

メイドさん一人

王妃付き侍女で、王妃のことを慕つていて。

アニーと同じような属性の一人。

可愛い子ちゃん

ライ

ウイート国の王様で、サシヤの旦那様。

作中登場回数が少ないけど、執務中です。

次回はきっと登場予定。

お読みいただきまして、ありがとうございます。  
そして遅くなつてしまい大変申し訳ございません。  
今回でとりあえず朝は終了です。

次回も是非よろしくお願い致します。

初めて出会ったのは中学の入学式だった。

彼とは隣同士で、気が付いたら話が盛り上がり乐しくて。気が付いたら好きになっていた。

それなのに彼は私じゃなくて、ずっと一緒にいた私の親友を選んだ。

……今まで思い出せる、一人の苦く傷付いた表情。

ふられた私なんかより一人の方が苦しそうで、でも私も笑つてあげることができなくて。

一人から逃げて……そして一人ともなくしてしまった。

……はずだつたのに。

綺麗で纖細な細工が施された家具。高く美しい紋様の描かれた天井。絹のように滑らかな手触りのベッド。

一日見ただけで庶民には息の根が止まりそうな価格なのだろうと分かる。

超豪華スイートルームが体験出来るのだとしたら、こんな感じなのだろう。

勿論、朝の部屋と一緒にです。ただいま、ふかふかベッド！

「……生きているか？」

抑揚のない美声に返事をする気力と体力はありません。

あの、変態女装貴族め！淑女になるためと鬼のよつな特訓をかせられた。

筋肉痛が明日を待たずに訪れて、何をするにも億劫だ。もう指一本うごかしたくありません。

……って、あれ？

「何で居るの！？」

「何でって、俺の寝室だ」

何を今更と、訝しげな表情の美形はライだ。

こうしてみると、やつぱり今日会つた中で一番美形だな。  
こんな人が、私の旦那様……やはり美的感覚が狂っているか、視力が相当悪いのかどちらかだ。

いやいやそうじゃなくて、俺の寝室つてそつか。王様の寝室だから一番豪華なのか。

「あ、そりなんだ。」「めん

「つて、どこへ行く？」

ベッドから降りようと私の腕を強引に引き寄せて、またベットに転がせた。

「お！筋肉痛で痛いんだから触らないでよー！」

若干涙目で、顔を上げる。

「だつてここでライが寝るなら、私はあっちく……」

「お前の寝室なんだから行く必要もないだろう？」

「へ？私の寝室でもあるの？と思つたけど、そういうえば夫婦なんだからそうか。

いやでも、記憶ないんだし、ちょっと一緒に寝るのはどうなんだ

る……？

さうと見ると、ライは自然に私を抱き寄せるように寝転がる。顔なんでもう数センチですからって距離。美形は好きだけど、この距離は危険だ！

「ち、近いって……」こんなに広いベットなんだから近くで寝る必要ないでしょ……」

「今更だ……我慢しろ」

ええええ！本当にこうやって寝ていたのだろうか？  
だつてこんなにも美形なんだから、他にも行くところあるでしょ。  
でもアニーは側室いないって言ってたっけ。うん、勿体無い。  
美女のハーレムだつて作れるのに、どうして作らないんだ。

「何を考えている？」

「え、えっと……私がこっちに来たときのこと教えてもらいたい  
なーって」

本当は違うけど、こっちも知りたいことだし……

ライは一瞬眉を寄せて、何かを考えている素振りを見せた。  
何、その表情？もしかして……何か隠している？

「わかった。但し一晩に一つだけ答えることにする」

「え！どうして？」

「お前のことだ、何でもかんでも考え込んで眠れなくなるだらしくへ……」

「うーん……」

いつもみても探究心旺盛な私なら一晩徹夜してもおかしくはない  
けどたしかに連日寝不足になりそ。

やっぱり夫婦だからか、私のことよく解っているな……。

でも本当は何よりその紫の色の田が心配そうに不安そうに見えた

から、ここは頷いておこへ。

朝も思つたけど、その田に弱いんだよね。『記憶ないのに変な感じだ。』

「わかった……じゃあ、私がこの世界に来た日のこと教えて」

「……その日は、城で夜会が開かれる日だった。考え事をしていた俺の上にお前が降つて來た」

「降つて來た？ そんな雨みたいなものじゃあるまいし、と思ついたらライは真剣そのもの。

え、本当にライの上に降つて來たの？ 物理的に？」

私の疑問に答えるかのように、ライは呆れたようにふつと笑う。

「新手の刺客かと思ったが本当に何もないところから降つて來たからな。とりあえず異世界人だということはわかつた」

「何もないところへ、それってどこなの？」

ある口道を歩いていたら降つてきたとでも言ひのだろうか。素直な疑問をぶつけると、ライは微かに意地悪く笑つた。

「一田一問と言つただろう？ まあ、もう寝る」

そういうつべつと更に引き寄せられて、『気が付けば腕の中同然。近いつて！ 近すぎるよ…』

まだ彼氏彼女の付き合いで経験が0の私には刺激強すぎると。

「ちょ、ちょっと、離れてよー。」

「何でだ。黙つて田を閉じたら直ぐに寝るくせに」

むむつものすごい寝つきのいい人見たいに言つなー。

こんなに近いと心臓がバクバク言つていて寝れるわけないでしょ。

とりあえづ目を閉じる。

すると柔らかくベッドが疲れた身体を包み込んだ。

そういうえば、かなりきつかったんだっけ。明日も続くとなると正直悪夢しか見なさそうだ。

見るとしたらド派手な色の悪夢……どう考へてもクレイのせいだ。でも、傍にいる人の温かさもあって、どんどん眠りの世界に引き込まれていくような……。

……あえなく、撃沈。

「……………わわ」

夢におひるまえに、誰かが囁くよつて私の名前を呼んだよつた気がした。

## 夜話1（後書き）

次回はちょっと間があきました。  
申し訳ございませんが、お待ちいただけた幸いです。

果たして、人は音を立てず口を開けず食事ができるのだろうか。さらに、蝶々が舞うように優雅かつ淑やかに歩けるのだろうか。答えはわからないけど、私には無理。

だつて、普通の高校生だつたんだから。

……なぜ、だつたと過去形か不思議かもしけれない。

その経緯は残念ながら、今の私も分からぬ。嘘みたいな話だけど、朝起きたら8年後。

しかもそれどころか、ここは私の知っている日本ではなくて……。

気が付いたらファンタジーでした！

ちなみにファンタジーと読んで、異世界とかく。

ああ、大丈夫、ちゃんと起きてるから。寝ぼけてませんから。

「…………」

そんな私は絶賛迷子中です！

……て、そろそろそんな冗談は置いておいて辺りを見回す。

しかし、どこまで行つても樹木、花壇、樹木、時々ベンチ。

まさか庭で迷子になるなんてそんな馬鹿な……とお思いの方、甘

い！

一度だけ一階の窓からみた庭園はシンメトリーで綺麗だと思ったけど、実際歩いてみると同じような風景が続いている。

「ここの話、方向感覚が狂つていると自己共に認められているほどの方向音痴なんだよね。

そんな私がそもそも探検なんて無理な話だったのだ。  
まさか、ないとは思うけど。

このままずっと迷い続けることはないよね……。

本当に何度も解らないため息をついた。

どうしてこういった事態になつたかは、約一時間半前に遡る。  
依然として16歳の意識のまま、異世界生活一週間目。  
私はついに脱走してしまった。

『脱走』は言い過ぎかもしれないけど……まあ、ちょっと黙つて

出てきてしまったのは本当。

朝晩近くまで一週間ひたすら、あのどうの女装変態貴族にして  
かれた結果かもしれない。

「蝶の様に舞い、花のよつに艶やか、つてどんな状態やねーん！！

！」

はあはあ、と大声で絶叫したところで誰も驚く人はいないが、虚  
しいぐらいに声は木靈している。

似非関西弁に驚いたのか、鳥達が多少羽ばたいたような音はした。  
でもお陰ですつきりしたよ。やっぱり不満をためてるとストレス  
で死んじゃうつて。

そこで冷静になつて辺りを見回して思った。もしかしてこれは本  
格的にヤバいんじゃないの？

王妃様が自分の家（城）で迷子になつて、そのまま餓死してしま  
いましたとか……。

考えただけでも、ぞつとするといふか……。

「そんな死に方嫌だ……」

末代までの恥だ！

きつと教科書やら歴史書やらにのつて、歴代一のマヌケ王妃として語り継がれていく。

そんな未来が少しだけ垣間見えて、頭を抱えた。

何だつてこんな目にあつてるんだ！

これも絶対あのどら女装変態貴族のせいだ！

まあ、確かにちょっと素質がなかつた私にも落ち度はあるけどさ。

うん、ライに言つてみようかな。王妃様の素質はありませんって。

だつてどう考へても可笑しい。あんな美形がわざわざ得体の知れない異世界の平凡女を王妃にするなんて。

「……あれ？」

微かに、声が聞こえる？

風に乗つてだけど、人の声……というか、ないていふよつの声？まさか王城の庭なんだから獸とかはいないよね……。

抗え切れぬ好奇心に負けて、声のするほうへ足を進める。ちょっと広場みたいに整えられていて、その中心に設置されるベンチに声の主はいた。

小さい……子ども？ 5～6歳ぐらいかな？ づくまつて泣いているようだ。

「どうしたの？ 大丈夫？」

どうしてこんなところにいつ疑問の前に、心配になつて声をかける。

こんな小さい子が泣いてるんだもん、声をかけないほうがおかしいつて。

声をかけて私の気配に気付いたのか、泣いていた子が顔を上げる。

その瞬間、私は天使にあつた。

そう錯覚するほど、天使のよつに愛らしく可愛らしい男の子だ！  
艶やかな黒髪に、泣いていて真っ赤な頬っぺた。

ふさふさの瞳に涙の零が乗っていて、きらきら輝いている。

きっと世界中の人々を感動の渦にした、某有名な犬の主人の少年  
の死に際に迎えに来た天使はこんな子だ！

まあ、天使は金髪がセオリーだけど、そんなのは関係ないね。

ああ、私の内なる秘密の扉が開かれそうだ。といふか既に開かれ  
ている、頬つぺたすりすりしたいー！！

「……かあさま！」

鼻息荒く拳動不審に現れた私に怯えられると思つたけど、予想に  
反して天使は私の胸に飛び込んできた。

その愛らしい行動に、思わず腕を広げて受け止める。

かーわーいーいー……ぎゅうつと抱きしめて、私のことを「かあ  
さま」だって！

あれ……か、あさま……？

「だ、大丈夫？お母さんとはぐれちゃつたの？」  
「かあさまー！」

……うん、間違てるだけだよね。だつて迷子になつて心細いだ  
らつ。

ありえないありえない、こんな天使のお母さんなんて。一瞬どき  
つとしちゃつたよ。

ふう、落ち着け。心中で一呼吸をしてから、この天使の頭をゆっくりと撫でた。

「落ち着いて、大丈夫だから」

「うん……」

「それでどうしてここにいるの？」

「かあさまにあいにきました……かあさまがビヨーキになつたって

……」

つまり話によると病床の母に会いにきたのね。

くう、なんか感動の話の予感が！

私こじういう話には弱いんだよね、母をたずねて系とか。あ、思い出しただけで涙がでそうになるよ。

「でもよかつたです！かあさまにあえてうれしい！」  
「よかつたねー……ってあれ？」

かあさまに、あえて？会えたんだよね？いつ会つたの？  
それに先程から、嬉しさが溢れんばかりの笑顔をコチラに向けてくる。

そのキラキラ笑顔に悩殺され氣味だけど、しつかりしろ私！  
まさか、まさかだ。あれ、最近このパターン多くない？  
とりあえず事実を確かめるためにも誰か事情を知ってる人ブリーズ！

「あの、出口つてわかる？」

「いっちです！」

天使にぐいっと手を引かれながら進む。

しつかりした足取りにこの庭園を知っているのがわかる。

「ここに」と笑顔を向けられるたびに撫で撫でしたいのぐつと堪えた。

見た感じの身なりは正直お坊ちやまつて感じだ。うん、どうみても王子様っていうか……。

いやもしかしたら予想が外れるかもしれないし、物理的に私からこんな可愛い子が生まれるはずがない！

「コーリウス様！……と、サシャ様！？」

建物が見えて迎えてくれた可愛らしいメイドさんは天使もといコーリウス様に安堵し、隣に居る私に驚いていた。

え、ええー、その後ろには鎧兜みたいなのかぶつた人も大勢居るし、なんか……大変なことになってる？

メイドさんは発見の報告を叫んでから、私たちを建物の中に誘導してくれた。

洒落にならなそうな事態に顔を蒼くしていると、コーリウス様は不安そうに見上げてくる。  
だ、大丈夫だよー多分……。

「サシャヤ！…」

その中で、一番通る声で私を呼ぶ声がした。

この声は……まさか、まだこんな昼間だし……。

そろりと顔のほうを見ると、やはり執務中だったのかきちんととした格好のライがいた。

「うやつてみると本当に王様なんだな……威厳があつて神々しい感じ？」

わらわら集まっていた兵士さんやらメイドさんが端っこに急いで寄つてライに道を作る。

な、なんか逃げ場なくしたかも……！

「無事だつたか……しかし、なぜ黙つて姿を消した?」

「うーー怒つてゐ、ちゅう怒つてゐよー。

ものすごい美形が怒つたら、ちゅう怖いってー心なしか気温が下がつているような……。

そして怒つてこるライは私の隣に屈むほづく目を向けた。

「それに、なぜゴーリウスがここに?..」

「だつて、どうせめー。」

「サシヤの面会は許さないといつたはずだ」

ひしゃつとしたライの言葉に、天使はまた目に涙をためる。  
こんなに可愛らしこのライつてば厳しそうでしょー……つて、  
ヒツヅカ。

「あのー、ライ?もしかしてゴーリウス様はライの子ビも?..」

……マヌケな質問だつていうのは解つていて。

でも冒頭でも説明したように私の記憶は16歳なんだつて!  
確信めいた予感しかないよ、もうー。

「……かあさま?」

「ああ、そうだ……そしてお前の子でもある」

ゴーリウス様は不思議そうに私とライの顔を見回す。

天使のように愛らしい外見はライ譲りだと考えれば納得がいく。  
まん丸と大きい瞳の色は紫色……そして髪の色は黒色。

ああ、誰か、この際ドッキリ企画だといって……。

とりあえず疲れからか、新たに判明した事実のダメージが大きい

からか、私の意識は言葉どおり遠くなつた。

地球の家族の皆様。

どうやら私、結婚して子どもいたみたいですね。

## 5・(後書き)

更新が長らく開いてしまい大変申し訳ございません。  
そして展開が急すぎて申し訳ございません。

不定期になってしまいますが、お付き合い頂けますと嬉しいです。  
人物紹介はまた次回に行いたいと思います。

「……わあああああ……」

がばつと起きると、傍に控えていたアニーがびっくりしていた。心配そうな表情で、こちらに近付いてくる。

あれ？ 私どうしたんだっけ？

ふと、ソファーベットみたいなもので寝ていたのに気付く。しかし形はソファーみたいだけど、大の字になつても余るぐらいなんて。

もうこれ、簡易ベットでしょって、そうじやなくて。

「サシヤ様、びつされましたか！？」

「な、なんか、不思議な夢見てさ～」

そうーーそうだよ、子どもがいたなんてそんな冗談……ないよね？ 確かに天使だつた。艶やかな黒髪に、すみれ色のくりつとした大きな瞳。

ほっぺたはマシュマロみたいにふにふにしてそうだし、笑顔は天に召されるほど可愛かつた！！

ああ、もつとちゃんと抱きしめておけばよかつた……。

でも夢にしては具体的で、こつなんていうか……リアリティがあつたっていうか。

あれ？

「……あの子、黒髪に天使みたいな見た目のコーリウス様って知つ

てる？」

「え、ええ。サシャ様、記憶がお戻りに！？」  
「いやいや、全然」

まつたく、これっぽっちも。

首を激しく振っていると、アニーは残念そうな表情をした。

……つまりコーリウス様は実在する人物で、何か関わりのある子  
だつてことだよね？

さ、聞くのが怖い！…でも知りたいような…もどかしい。

「……なんだ、元気そうじやない」

隣室に続く開け放しの扉から、真っ赤な塊が顔を出した。

とまさしく言いたくなるような格好だ。

頭には大きな薔薇のコサージュで纏めてあって、真紅のベルベッ  
ト地の波打つドレス……。

もちろん変態女装貴族のクレイです。

「つたぐ、ほんとお騒がせ王妃ねえ。勝手に脱走しておいて、意  
識失うなんて」

「…………」

「コーリウス様にもお会いしたついで、陛下まで出て来ちゃつ  
たから、皆大慌てよ」

クレイはため息をついて、心底うんざりとした表情をした。

でも呆れているのと同時に、愉快そうな色もちらほら……くそつ、  
人事だと思いやがつて！

と、そういうれば天使、もといコーリウス様はどうしたんだ？…  
。

あと最後に居たはずのライもいない？

「や、そのゴーリウス様とライは？」

「……おかげしそうだけど、ゴーリウス様はお部屋でお勉強。恐らく陛下なら、もう直ぐ来るわよ」

「やっぱり、ライつて怒ってる？」「

癪だけど恐る恐る伺ひよつて聞くと、クレイは真っ赤な口紅に彩られた口の端を引き上げる。

まさに「覚悟しておきなやこ」と言わんばかりの表情で……。

ひいいっ！逃げ出したい……

しかし、クレイとアニーに見張られている状況ではビリヤッても無理だ。

「……そのこと、意識を手放してしまいたい……。

「……起きたのか」

そういひじてこむ内に、部屋に美声が響く。  
よく通る声だからすぐに解った……淡々と落ち着いているようだけど、やっぱり怒つてます？

『やややや、と擬音が付きそつて首をゆづくら向けると、最後に見たときよりはくつろいだ格好をしていた。

例えるなら、スーツ姿でもネクタイと背広は脱いだよみたいな？  
いつちの世界の男性の礼服見たことないから解らないけどさ。

「ライ様、国王様としての執務はよろしいのでしょうか？」

「陛下、公務の方はよろしいのですか？」

「良いい、あとはあいつらで何とかなる。それよりクレイ

「……はい」

「この度の責任、どうせやつて取るつもりだ？」

あ、あああのー！傍若無人が形になつたようなクレイが頭を下げて  
いるよー！

しかもいつもより緊張しているみたいだし……まあ、私も絶対零  
度のオーラが出ているライを直視できていなければ！

こうしているとやっぱリライは偉い人だ……部屋に緊迫した空気  
が流れる。

もしかしなくてもクレイは責任をとつて、何らかの罰を受けなく  
ちゃいけないのだろう。私のせいだ。

……ちょっと待つて！

「元はと言えば私が勝手に抜け出したのが悪いんだし……クレイに  
責任はないよ！」

まあ、それもクレイの地獄の特訓が原因だけね！

ライはクレイからこちらに、ゆっくりと視線を向けた。

視線がぶつかって揺れる紫色に、同じ瞳のあの子を思い出す……  
あの子、ヨーリウス様は泣いてないかな。

きっと、最初出会ったときのように泣いている。

あの子に会いたいけど……まずはライに心配かけたんだしちゃん  
と謝らなきや。

「…………ライ、ごめんなさい」

「…………まったく、この最近はお前に振り回されてばかりだな

ふーっと疲れたようにため息をつく。

うん、心配ばかりかけてごめん。

ライだって王様なんだから色々大変だしつ、肝心の王妃がこれ  
じゃね……。

本当にじつして結婚しようと思いたつたのか、謎だよね。

頭を悩ませてこると、ライは言葉を続けていた。それはもうつい

での何かのよ「ひ」。

「なら、サシヤ。皆を振り回した罰に、来月の公務を言い渡す」「へ？」

「隣国の来賓を交えての晩餐会だ。きつちり、礼儀作法を学べ」「れ、礼儀作法……？今までクレイから学んでいたこと、だよね？え？ばんさんかい？晩餐会って、みんなでお食事すること？それとも口マナス映画にありがちなダンスパーティーみたいなこと？」

隣国との晩餐会！？どーしてそんな展開に！？

「サシヤに晩餐会を承諾できてよかったですわね、陛下」「クレイ、くれぐれも逃げ出すような特訓はやめろ」「ええ、サシヤの努力次第で善処いたします」

先程と、この変わりよ「ひ」……。  
やれやれといった態のライと愉快そうに微笑むクレイの一人に……  
間違いなく嵌められた？  
茫然としている私にこいつそりとアーネが教えてくれた。

「サシヤ様の晩餐会嫌いは前からのことなので……」

そーゆ「ひ」とかい！  
目の前の二人組を一発ずつ殴りたい……。  
一応お貴族様と国王様だから、だめか……。  
ぐつと、拳を押さえた。うん、私つてば大人！

「サシヤ、これは罰だからな。ちゃんと約束を守れよ」「……じゃあ、ゴーリウス様に会わせて！」

どう考へても要求できる立場じゃないけどー。

とりあえずあの子に会いたい……そ、ついひつと、からかう様なライの表情は真剣になった。

クレイとアリーまでそれにひたれる。といつか、心配そうな表情? 皆の様子が一瞬で変わった中、やや険しい顔でライは問う。

「……ユーリウスのこととは思い出したのか?」

「ううん。でも泣いていたから……それに事実が知りたい

もうこれ以上驚くこともないはずだ。

だって最初からいきなり8年後だって言われてるし、結婚もしているし。

その可能性については容量一杯で、今まで思いつかなかつたけど……ありえるよね。

「ユーリウスは紛れもなく、俺と……お前の子だ

ですよねーーー!

ただ、ただね、私のDNAがどこにも見当たらないけど。

ああ、あるとすれば唯一黒髪ぐらーー?

それでも、容姿は田の前のライをマジマジして可愛がだけを強調した姿……。

平々凡々の私と本当に血が繋がっているんですか?

「ユーリとお前は呼んでいた

「ユーリ……」

ユーリ……ユーリウス、つて呼ぶよりもしつくづく。

そういえば、ユーリウス様って呼んだら驚いたような表情をして

いた。

「記憶のないお前が、コーリウスに会つて何ができるの？」

真直なライの言葉に、胸がつかれる。

記憶のない私に……なにができる？

……そうだ、だつて王妃だって言つ血覚もないのに。

言葉が出ずには、私はただ、ライを見つめるしかできない。

「それが解らないお前に……コーリウスを会わせるとはできないこ

それでも、あの子は泣いているような気がするの。どうしてか、心の奥底からそう叫んでいた。

それなのに、私は言葉がでなかつた。

お読みいただきましてありがとうございました。  
変に続いてしまい申し訳ございません。  
できれば、今月中にも更新したいと思います……。  
遠くなるかもしませんがよろしければお付き合いでください。

「……サシャー！」

あ、と思ひて勢いよく顔を上げる。  
すぐ目の前の、厳しい顔をしたクレイに驚いて飛びのいてしまつた……。

いや、キツイって……そりや一般的に整っているけど、ぱっけしマイクした女装顔が間近なんて恐ろしいよー。

今日の夢に出でただ、いや確実に出るー!井戸から出でてくれる人のみたいにー!!

ちなみにあの映画みてから、暫くはビートオ再生が怖かつたのを思い出いた。

「あんた、絶対失礼なことを考えているでしょー！」

「いや……そんなことないよ~?」

おかしいな、何でバレたんだ?

全く以つて反省はしていないけど、一応小さく謝つておひば。このどうを怒らせるとマズイのは身を以つて知つてゐるじ。

「『めんつて』

「誠意の欠片もない謝罪ね……それより聞いていたわけ?」

「えーっと……たしか晩餐会の開催目的だっけ?」

「さうよ、我が国が主催とはいへ要するに隣国との和平調停記念よ

えーと、「」ウイートランドは、近隣ではまあ大きこ国ではあるんだよね。

農作物から鉱石発掘や貿易商などが盛んで、商業都市が有名ついつのはちょこつと学んだ気がする。

で、お隣のバ、バードランドだつて、鳥王国みたいな名前だったよな……。

歴史が苦手だと言つことを忘れていたといつか、こつちまで勉強しなくてはいけなくなるなんて思いもよらなかつたよ。

「隣国ヴァードランドは織物が有名ね。その技法について戦が起つたほどよ」

「うーん、鳥みたいな名前……そりこえればウイートランドと名前が似ているね」

「そりや元は同じ国が分裂したんですもの。だからこそ仲が悪かつたのよね」

「仲が悪いの?」

「昔の話……とも言えなくもなつてきたけど」

クレイが眉を寄せて、私の顔をまじまじと眺めた。睨んでいると、言つより、値踏みされているよつな?

一体何なんだ?それに結局仲悪いの?

疑問に思つていてるうちに、クレイは一つため息をついた。

それはもう、疲れたよつて。何だか解らないけど、絶対失礼なこと考えていろでしょ!

「……まあ、ユーリ様もいらつしやるだらつし軽率な真似がしないとは思つナビ」

「ユーリ?どうかしたの?」

「「」うちの話よ。いいからアンタはテーブルマナーをしつかり頭に叩き込みなさい」

皿の前には、何も乗っていない白い皿とフォークやナイフやらがずらりと並んでいる。

「うへ、一般家庭に育つた私にとって、食事なんて箸一膳で充分だよー。」

大体、ちょっと違うからってその都度フォークやナイフを変えるなんてHコじやないよー。」

それに比べたら、日本は箸一膳で何だつて食べちゃうんだから経済的だね！

わすがHコ大国日本！

Hコポイントが終わったのは残念だけビ、ちやっかり者の母上は抜け目なくHコポイントを使っていたよ.....。

でも、母といえども思ひ出す。『かあさま』に会っこきたといつあるの子のことを。

「また、違つこと聞えてるわね？」

『あへー。

と、ワザとらしくビクついて、クレイの制裁を待つけどやつてこない。

ちらりと窓の外を見ると怒つとおらず、真剣な表情をしていた。

「.....陛下に言わたこと、まだ気にしてゐるのね」

「.....うん」

あのあと、何か急用が出来たライは行つてしまつた。

私は何も答えられないまま、黙つて見送るしか出来なかつた。

だつて.....だつて、私は16年の記憶しかなくて。

結婚でさえ、ようやく法律上できる歳になつたばかりなのに、子どもがいましたなんて。

でも同時に黙っていたこともやむやむ。『うしてこんな大切なことを黙っていたんだろう。

「そりゃ陛下だってアンタにいつまでも黙つては居られないとは考えていたわよ」

私の考えを見抜いたのか、クレイが私の頭をぽんつと叩く。それは全然痛くなくて……どちらかといつと励ましつて感じ。

「でも」

「アンタが拒絶したらコーリ様はどうすればいいの？」

被せてきたクレイにでかけた反論が口の中で萎む。泣いていた、コーリ。きっと『かあさま』が大好きなんだ。ライも、コーリのことが大切でああい風に言つたのは解つた。……じゃあ、私は何ができるの？

「拒絶しなんてしない！」

そんなのはシンプルだ。

頑張つても残念な頭を捻つて考へてもできることなんてわからぬに決まっている。

高だか、16歳の小娘になにができる？まあ、今は24歳だけどね。

それに、天使と見間違つほどの愛くるしい子が私の子だと！？なんて、ラッキーなんだ！基本無宗教だけど、神様ありがとう！

「アンタねえ……本当に解つてるわけ？」

「解らないよ！でもコーリが泣いているのは嫌。母親として振舞えないかもしねいけどあの子が望んでいるなら会いたい」

お父さんだつて、お母さんだつて、兄や弟だつて。

普段は口も悪いし、扱いだつてぞんざいだし、私は橋の下で拾わ  
れたのねネタはとりあえず兄弟分だけやつた。

それでも、何も言わず寂しいときは一緒に居てくれた。

……会えるなら、会いたい。

「……陛下をどうやって納得させるつもり?」

クレイは呆れたように、額に手を当てていた。

こういつたとき、クレイは味方で居てくれるといひか知つていて。これは、きっと私がどこかに置いている『私の記憶』。  
解らないけど、そうだと思つ。

「なんにもしないよ

「はあ?」

「大体ライは横暴すぎるー!」

一気にもやもやが、むかむかに変わる。

最初から思い返せば、そうだった。横暴だ、あのイケメンは!  
くやしげぐらいにイケメンだし、優雅で気品溢れているけどさー。

「だからさ、クレイ

「え?」

につこつ笑うと、クレイは後ろにたじろいだ。

どう女装貴族のクレイにしては珍しい行動。

うふふ、気持ち悪い笑いだけど、今ならなんにも怖くない。  
それほどに私の怒りは深いのだ。

偉そうなライ、つて王様だから当たり前だけど。

何でもかんでも想い通りになると困つなよ、その美形の顔を明かしてやるー。

「協力してくれるよね？」  
「……何するつもりよ」

諦めた様子のクレイに、私の笑みは益々深まる。  
私の『したいこと』を話すと、クレイは一瞬だけ目を見開き、深々とため息をついた。

「ほんっと、あんた達夫婦の喧嘩はひくでもないわね

喧嘩じゃないけどね。

コレは一方的に、だけどそれをかた反逆する話なだけ。

## 7・(後書き)

お読みいただきましてありがとうございます。  
思つたより続きます……。  
今月中に2章は完結したいです。  
次回もよろしくお願ひします。

ちょっと前に一世を風靡したメイド服は、今となつては定番だ。定番って言つても実際に着てている人が居れば一度見はしてしまつけど。

学園祭でも定番設定のそれを可愛い子がきていたら田の保養……もとい、可愛いから和む。だけど、ぶつちゃけ若さで何とかなるようなものだよね。今着ている服を見下ろして、ため息がつきたくなった。

なぜなら、問題のメイド服を着ているからだ。

はい、そこ年齢のことは言わない——……そういうのは本人が一番わかっているから。

でもメイド服つていつても、見た目重視の可愛いやつではない。王城で一般的に着てている仕事着なのだ、これは。

ふんわり膝下のスカートは、ふんわりしているから余裕があつて早歩きに最適！

しかも下にかぼちゃパンツみたいなのを履いているから、スカートが捲れても無問題。

フリルのついたエプロンも、びっくりするほどポケットが付いていて某未来型ロボットも更に真っ青だ。

どうりで、アーネが櫛やら鏡やら化粧道具やらを何にもないから取り出すよ！

うーん……この機能性重視の制服は誰が考案したのだろうか。おつと、そもそも萌と効率の共存はおいといて。

「えっと、三つ皿の角を曲がるんだっけ

クレイから渡された地図を見る。

といつても方向音痴の私を知っているのか、クレイは丁寧かつ慎重に根気よく教えてくれた。

……まあ、途中から指示書になつてゐるけどね。このとおりに行けば着くと最後のほうは諦めがちに。

うん、なんか致命的な方向音痴でごめんよ。

「…………」のつきあたりつと

あの子、コーリに会いに行く。

クレイは面白そうに笑つて、当然のようにアニーは反対した。ライから部屋から出すなど言われていたらしく。どうしても会いたかったからお願いすると、アニーは渋々頷いてくれた。

メイド服と皿立つらししい黒髪を隠すためのカツラを持つてきてくれたのはアニー。

直前までは一緒に行くと言つていたけど、クレイがそれを止めた。どうやらアニーは、王妃つきのメイドとして城では有名らしい。『そんな目立つアニーと一緒にいるところを田撲されて、ついつかり陛下に報告されたらどうなるかしら』

と、クレイの鶴の一言で、泣く泣く諦めた。

しかし説得された相手がクレイなのが大変不本意なのか、二人とも微笑み合つているのに背景にブリザードが見えるよ！

こんな古典的漫画表現を実際に見られるとは……。

うーん、戻るのが怖い。けど、クレイには必ず戻ることを約束の上の協力だからそれはできないけど。

「……」

重厚そうな扉をゆっくり開く。  
クレイの言つていたとおり一間の受付みたいな部屋があつて、その前に一人が奥に続く扉をはさむ様に立つている。  
鎧はつけていないけど、剣は持つているから兵士だよね。  
そのうちの片方を目が合つた。

「何か御用ですか？」

「ええと、王妃様からコーリウス様宛てに手紙を預かってまいりました」

メイド服に茶髪のカツラのおかげか、どうやら氣づいていない様子だ。

持つてきた手紙を出すと、もう一人とアイコンタクトをついた。  
なんか、こうしてみると兵士というよりは騎士って感じだ。  
よくよくみれば、爽やかイケメンって感じだし、この城美形率高  
え！

「ではお預かり致します」

「い、いえ！ 王妃様から、言付けも頂いてますのでー！」

するとちょっと困ったような表情。

もう一人の体育系イケメンとまたまたアイコンタクト。

「陛下からはしばらく誰も通すなど……印は確かに王妃様のもので  
すね」

「床に臥せつている王妃様からぞーしても伝えてほしい」と言われて  
いるんです！」

わざとらしく顔を伏せて泣く真似。ちょっと大げさかな？

でも兵士さんたちには効いているのか、あせつた様子を見せだした。

実は私つまり王妃って、ほかの人には病氣ということになつているらしい。

だから子供であるユーリに会えないのも公の場に出ないというのも、それが原因ということになつていて。

お庭で遭遇しちゃったとき、氣を失つて倒れちゃつたから更に信憑性がましたらしいし。

「……わかりました、どうぞ」

なにやら小声で話し合つたかと思つと、奥に続く扉をゆっくり開いてくれる。

とりあえず頭をぺこりと下げて、扉の中へ入つていつた。  
「うん、なんか胸が痛むなあ……困惑した表情の中に、心配そうな表情も見えたから。

臥せつてていることになつてているのは、私が記憶がないから。  
でも本当に覚えてないんだよね、懐かしいという感覚もないから毎日が新鮮な感じ。

「……失礼しまーす」

一通り見たけど中には誰もいないみたい。

一階に位置していいいるこの部屋に入つてすぐに大きな窓が目にに入る。

まだ日は高いけど薄いレースで覆われているからそんなに眩しくはない。

部屋を見渡すと、子供向けの内装だけじゃあり豪華だ。シンプルなライの寝室より華やかな印象を受ける。

あれ、コーリーいないよ？

「コーリ殿下ー？」

あまり大声出すと部屋の前の兵士さんが飛んで来そうだからやや押さえ気味に。

扉のない寝室を覗いてみると、そこも無人だ。

おかしい……ここは一階だし、窓の下には他の兵士さんが見張つている。

この部屋に居るはずだけど……かくれんぼ？

だとすると、どこに？

コーリは小さいから家具の上には隠れられないし、となると下だよね。

食卓で使われそつなぐらに大きい机を見て、棚の一一番下を開いてみると。

いないとなると……ベッドの下かな？

「コーリー？」

暗いけど、小さな影が見えた。

小さく丸まって、声をかけてもぴくつともしない。

え、ちょ、大丈夫だよね？

焦りつつ引つ張ると、コーリの瞼は閉じられていて呼吸も規則正しい。

……寝ちゃってる？

ゆっくりとベッドの上に寝かせて、顔にかかつた黒髪を横に撫でる。

やつぱり天使のような寝顔だなあ。もうずっとなでなでしたいぐらいに可愛い！

子タレだった今頃大活躍だよ、CM引っ張りだこ。

まあ、ここには子タレもCMなんでものもないだろうナビ。  
その天使のような寝顔に涙の後がある。  
泣いていたのかな……。

「……だれ？」

ゆづくつと瞼が開いたかと思つと、涙を拭つて擦る。  
可愛こいぢやなくて、お皿覚めだ。  
薄暗いし、カツラをつけているせいかわからないか。

「私だよ、ゴーリー」  
「……かあさま？」

大きなすみれ色の皿を、更に大きくして見つめている。  
まるでお化けを見たような反応だけど……そりやそうか。

「どうして……かあさま、おぼえてないって  
「……ゴーリー」

やつぱつ、ライは話していたみたいだ。

ゴーリの顔が不安そうな表情。  
まだこんなにも小さい子供なのに……私のせいだよね。  
私だけ、お母さんにある日突然忘れられたら、寂しい悲しい。  
それなのに、ゴーリは物分りの良いふりをして我慢している。

「あのね、ゴーリ」  
「かあさま？」

そつと、ゴーリに触れる。

正直、コーリを見ても記憶は少しも蘇らなかつた。  
未だに本当に私の子か、と半信半疑ではあるけれど……。

「それでもコーリと仲良くなしたいと思つの。コーリに笑つてほしー」

勝手かもしれない。

でも、コーリには笑つていてほしーって思つ。

それはもしかしたら、忘れてしまつた私の心なかもしれない。

「かあねまー」

コーリが抱きついて、大声で泣いた。

庭では声を押し殺すように泣いていたのに、今は小さい子供のように泣いている。

ようやく年相応の姿に、なんだか胸が温かい気分だ。

可愛いの最上級の言葉でも表せないよつなこの気持ちは……愛しいとか？

ゆつくりと、さらさらの髪を撫でる。やつぱり触り心地は最高だ。  
そうしていると落ち着いてきたのか、抱きついたままコーリは顔を上げた。

「でもびつかないでいいよー」

……そういえば、メイド服なんだつた。

茶髪のカツラも不思議そうに見ている。

まさか、お忍びできていますなんて、コーリに言えないし……。

そもそもライにバレたら、ヤバいよね。

まあ、ライの言うとおりにしていたら何時までもコーリに会えなかつたからいいけど。

でもばれていな内に戻つたほうがいいよね、アニーとクレイに

も迷惑が掛かるし。

「サシヤー！」

なんて考えていると、寝室の入り口から怒声が……。  
思つていたとおり、厳しい顔をしたライがいた。  
美形なだけあって、その眼光は絶対零度の冷たさを持つている。  
心なしか、部屋の温度も下がつて寒いような……。  
不安そうなユーリを抱きながら、私は乾いた笑いしか返せなかつ  
た。

8・(後書き)

続きが遅くなつてしまい大変申し訳ございません!  
そしてまだ引っ張ります。  
次もよかつたらよろしくお願いします。

ふわつふわの絨毯はおそらく幼いコーリのための配慮だろう。この絨毯のすわり心地は最高で、きっと転んでも怪我しない。手触りもさらさらで、お昼寝にもばっちこいですね！

まあ、こんな状況でなければお昼寝の一つや二つはできたかもしれないだろう。

その高級絨毯の上で、私は正座をせられている。

目の前には仁王像もびっくりの王様……怒っているライ様だ。しかし、ライはどうして正座を知っているのだろうか？ ジャパーズ文化なのに！

「……サシャ？」

「う……」

余計なことを考えていたのがばれたのか、すっと眼光が鋭くなる。わあ、怖くて顔が上げられないよ！

ちらりと見えたライの背後にある兵士たちも顔面蒼白だし。うんうん、やっぱり怖いよね。

ちなみにこの兵士たちとは、コーリの部屋の前にいた護衛兵なんだ。

というか、この人たちがライに知らせたのだろうか。

「まつたくお前ときたら……『』の国にメイド服に変装してくれる王妃がいる？」

「か、返すお言葉もありません……」

「先ほどの脱走から懲りていなによな」

「それは……」

ちゃんとクレイたむに話したし、実際に脱走ではないと想つた  
だけど。

なんてこつたら、もつと怒りそつだから怖くていえないけど。  
それに、なんかさー……ライつて過保護じゃない？

本当にこんな風に、私は行動を制限されていたのだひつか?  
むしろどんだけ暇なんですかって思えてきたよー。

もちろん、この一週間でライに暇などないことは知つてこ  
う。

「どうすまー…」

「ゴーリー…」

寝室で待機していたはずのゴーリーが、飛び出してきてライの足元  
にすがりつく。

驚いて、ライも固まつたままだ。

「かーちゃんをおこりないでください…」  
「しかし、ゴーリー……」

すぐさまライが膝をついて、ゴーリの田線にあわせた。  
いつも並んでみると顔がそつくりで、しかも美形親子！  
麗しい絵面で田の保養……つてふざけていふ場合じやなくして。

「……サシャは、お前の母はゴーリのことを見れてる」

「それでも、かーちゃんにあいたい……」  
「ゴーリー……」

幼いゴーリの頬に涙がぽろぼろと零れ落ちる。

何度も涙なのだろうか、すでに田は真っ赤にしていたの。

日本だったら、まだ幼稚園に通つてゐるような年頃の子供。

泣かせているのは……私だ。

気がついたら、勝手に体が動きコーリを抱きしめていた。

「じめん……」「じめんね、コーリ」

「かーさま……」

「コーリのこと、記憶なくしていても絶対に嫌いにはならなことよ」

それだけは、絶対に言える。

だつてこんなにも可愛いんだもん！ まつたく記憶がよみがえらなければ、これつて母性本能かな？

でも何だつていい、ただコーリと会つたためには説得しなくちゃいけない。

顔を上げて、ライをじっと見つめた。

「ライ、お願ひ……心配してくれのも分かつてる」

「サシヤ……全ての記憶がないお前にも良くないことだ」

「それなら私は努力する！ もうコーリのことは大好きだし、王妃教育もがんばるよ」

やる前から、諦めるなんて私にはできない。

頑張つても報われなかつたとしても……遠い昔のようすで、今の私にとってはつい最近の記憶がどこかで痛む。

その痛みがあるのは、まだどこかに未練があるからかもしれない。だつてあんなにも好きだつたんだ。ちょっとでも話を合わせようと慣れないことをしてみたりとか。

でも好きだから努力しても結局親友とできちやつたけどや、超凹んだけど。

つとそれは一先ず置いといで。

「だからお願ひ、コーリと一緒にこせせて  
「どうさまーおねがいします……」

眉を寄せ厳しい顔をしていたかと思つと、頭を押さえ心底疲れた  
ようになりはため息をついた。

もう怒つていみたいだけど、でもなんのこの疲れた表情？  
え？ええ？

「……勝手にしや」

ぐるりと後ろを向いて、部屋を出て行つた。

怒つてはいみたいだけど……もしかして呆れたかな？  
後ろに控えて見守っていた兵士さんたちも、焦った様子でライを  
追いかけて行つた。

そして入れ違いで来たのは、クレイとアーネだ。

……というかクレイの女装姿、コーリに悪影響じやないか？  
さりげなくクレイが視界に入らないように、コーリを後ろに庇う。

「……やるじゃない、サシャ」

「え、でもライって呆れて出てつちやつたよ？」

「あれば、呆れているんじゃなくつて折れたのよ」

折れた？えーとつまり妥協した、ということ？

不思議そうな顔をしていた私に説明することもなく、クレイは私  
の後ろに回る。

そしてコーリの頭を撫でまわしていた。

おおい…ひょっとちょっと、教育に悪いから勘弁してくださいよー。

「コーリ殿下！お元気そでなによりますわ  
「くれござまもお久しぶりです！」

……あれ？ 仲が良いよ？

でもクレイは私の後見人だし、そりや顔も知つていいか。でもユーリ、あなたはこんな風になつてはダメだからね。おかさんは全力で阻止します！

ああ、でもユーリだつたら似合つかも……いやいや、やっぱりめだ。

ようするにライの女装姿になつてしまつ……なんて恐ろしいんだ。

「サシヤ？ また妄想してるの？」

「し、してないつて！」

「ならいいけど」

うう、前から妄想癖が……あつたんだろうな。

クレイは完全にまたかという顔をしているし、アニーは苦笑気味だ。

「それより折れたつてどういうこと？」

「だーかーらあ、陛下はなんだかんだいってあなたの激甘なのよ…」

びしつと人差し指をさされる。

わ、私に甘い？ ライが？ 激甘？ あのスバルタ教育を課せてくる人が、あれでか！？

ていうか人に指をさしちゃいけないって！

「ユーリはサシヤ似だから、一人からお願いされると嫌とは言えないのよ」

「だから、私に協力したのね」

ユーリと直接会つて、一人でライにお願いする。

正直それしか解決策はなかつたんだろう。だから良いタイミングでライも来た。  
でもコーリつて私に似ているかな?どちらかといつとライをつくりだけ。

頭を傾げて「アーネがフォローてくれた。

「雰囲気、とこりますか。サシヤ様とコーリ様はよく似ていらっしゃりますよ」

「そうかな?」

「ていうか、陛下は過保護なのよ。記憶のないサシヤが苦しまないためとコーリ様が傷つかないために秘密にしていたんだし」

隠してはいたけど、毎朝記憶が戻っていないか確認するライが落胆した顔をしているのは知っている。

そして時々何かを言いたそうにしていた。

本当はコーリが泣くたびにもどかしかつたんだろう。  
でも私にはせかすこともしなくて。

何も言えなくなつて、クレイをじつと見た。

クレイは苦笑交じりの微笑を返す。

「さあて、問題も解決したことだし続きを始めましょう

「へ?」

「へ?じゃないわよ。陛下からもみっちり教育するように言われて  
いるんだから」

クレイがにやつと真つ赤な唇を吊り上げて笑う。

まるででなく、まじしく「覚悟なさい」と言つてこる! -?  
え?ええ?教育つて、まだ続けるの-?

つい先ほど、感動の再開を果たしたところのなに-?

「 言つておくけど、あんたのレベルはゴーリ様以下よ…ゴーリ様のお手本をまず真似なさい！」

「 かーさま、がんばって！」

「 もう勉強は、いやだー！」

どうやら、わが息子ながら大変優秀であると知るのはこのあとすぐのことだ。

やつぱり私の遺伝子はどういったの？ 本当はライのクローンか？ ああ、でも完璧なマナーのお手本を見させてくれた時の誇らしげなゴーリはとても可愛かったよ！

といふか私自身の問題は何一つ解決されていないところに気が付くのは、まだまだずっと先。

すっかり忘れられている晩餐会まで、あと一ヶ月。私はまだ何も思い出せていない。

## 9（後書き）

遅くなつて申し訳ござりません！

とりあえこの章は次の夜話2で終わりです。  
ぐだぐだ展開で申し訳ございません。

少々スランプ気味なので、テンション高くできぬように頑張ります。  
次もよろしければお付き合いくださー。  
お読みいただきましてありがとうございました！

「ライ、『ごめんなさい』！」

「とーちゃん、『ごめんなさい』！」

「……なにがだ？」

執務から解放されて戻ってきたライが珍しく少し困惑の氣味に返す。

そりやせうか、夜に寝室へ戻ってきて「きなり」頭を下げられたら困るだろ？

しかも私だけじゃなくて、ユーリも一緒に謝っているのでライは交互に視線を送っている。

「いろいろ心配かけちゃって……ライも忙しいのに」「とーちゃん、『ごめんなさい』！」

しょらじく俯くと、ライは焦ったような素振りを見せた。

……クレイの言つていたとおりだ。

低姿勢な態度をとると、頭「こなし」に怒れず困惑してしまうと教えられた。

そこをつましく使いなさいよ～。ところのモクレイのお言葉。い、いやーちゃんの反省はしてくるけどねー。

「……別に怒っていない。もつこいから、顔を上げる」「本當?」

ああ、と少し気まずいように視線を逸らした。といふが照れてる？照れているのを隠すためかコーリを抱き上げて、ベッドに近づく。突然抱っこされて不思議そうだけど、次にはコーリは嬉しそうな表情。

「今日は三人で寝るんだろう？」

「とーちゃん」

コーリを真ん中にし、その横に私とライが横たわる。まさに親子川の字だ。

じつしてみると、やつぱりライって父親なんだな。正直、子供いなさそうな雰囲気もあつたんだよね。だからコーリの存在には驚いたのなんの……。

ゆつくりと優しく、ライがコーリの黒い髪をなでる。コーリは片手ずつで、私とライの服の裾を握ったまま瞼を閉じた。まだどこかで不安なんだろう。そつとその手を握った。

「……今日は戻つてこないかと思つた」

「なんでだ。ここは俺の部屋だと言つただろう」

ぽつりと出た言葉に、少しだけ不機嫌そうにライは返す。勿論、寝ているコーリが起きないように小声で。

「ね、ぶっちゃけさ、他の女の人のところに行こうなんて思わなかつたの？」

「なんだ、ぶっちゃけといつのは……というか俺の妃はお前だけだと言つてこるだろ？」

わあ、今度は不機嫌そつだけではなく若干怒つている。  
びしひと怒りの波動が……ライはオーラでも操れるのだろうか？

さすが王様……「メンナサイ。

「い、いやだつてさー、私つてかなり平凡だし？」

正直、本当に恋愛結婚なのか気になつたけど聞けなかつた。  
アニーは大恋愛の末に結ばれたとか言つていたけど、それどこのロマンス小説ですかって感じだし。

具体的なことは何一つ教えてくれないし。  
いまいち信じられないんだよね。

それに、ほかの女人のところにも行くチャンスだけど遠慮してたりしていたらどうしようもないし……。

「そうか？なら思い知らせてやろうつか？」

え、と返す暇なく、突然紫の色が目の前に迫つた。  
ああ、ライの瞳の色とコーリの瞳の色は一緒だと気付く。  
そして、ふつと唇に吐息を感じた瞬間、唇が触れそうだと理解する。

誰と、だれの？

……つて、ううわあああああああつ！－

その時の私の行動は素早かつた。見事と褒めたたえたいほど素早かつた。

忍者顔負けの回避行動で、私の世界は回つた。

回つたというのは揶揄ではなく物理的に回つたのだ。

ええ、あの無駄に広いベッドから転がり落ちましたとも。

「ちょ、な、き、きき」

「大丈夫か？ちゃんと言葉を話せ。ほら

元凶であるライがベッドから降りて手を差し出す。

なんだか恥ずかしいのか危険を感じてなのか、その手を取れずにいるライは抱き起してベッドの端に座らせた。

その表情は……笑っている。それはおかしいそうに。なんかすっげえムカつく！睨みつけるけど益々笑うライ。どーせ、私の顔は真っ赤ですよ！言つておくれけど、ファーストキスもまだの純真な16歳なんだぞ！

「悪かった。変なことはしない」

「まったくだよ！」

「だが夫婦なんだからこいつのまつも少し慣れ！」

田の前に立つていいライは自然に屈んで、おでこに触れた。手とかではない、おでこの柔らかなこの感触は虜だ。先ほど触れそこなった、あれ。

「ライ！」

「ユーリが起きる。ほら、寝ろ」

ライは悪びれる様子もなく、また同じ場所に戻った。うー、納得いかない、非常に納得いかないけれど、私も同じ場所に戻る。

今後ライが近づいたら気をつけようという決意とともに。

田の前のライはほんのり上機嫌で瞼を閉じた。

こつちは心臓があはれているんだけど！誰のせいだよ！睨んで抗議するも、ユーリが起きてしまってどうだから何も言わないと。

今日寝れるかな……そつ思いながら私も瞼を下した。

でも不思議と嫌な思いはなくて。  
それどころか、なんだか幸せに満ちた夢をみたような気がした。

## 夜話2（後書き）

少し甘めを田指して失敗しました。  
いきなり変な展開で申し訳ないです。

次は私事都合によりもつと空いてしまってそうです。  
ですがよろしければ次回もお願いたします。  
お読みいただきましてあがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4454p/>

---

異世界でした！

2011年8月20日12時48分発行